

第2回新しい美浜の学校教育検討委員会 議事録

日時：令和8年3月18日（水）19時00分～21時00分

場所：美浜町役場 2階会議室

【出席委員】25名

名古屋市立大学 特任教授	鈴木 賢一
兵庫教育大学 准教授	安藤 福光
ひまわりこども園 PTA ひまわり会 会長	松永 健哉
こじか保育園 PTA さくら会 代表	田口 誠
こじか保育園 PTA さくら会 代表	津村 陽介
松原小学校 PTA 共啓会 会長	平井 絢弥
松原小学校 PTA 共啓会 副会長	龍神 早奈恵
和田小学校 PTA 育友会 会長	西 貴生
松洋中学校 PTA 松洋会 会長	金川 聖司
松洋中学校 PTA 松洋会 副会長	和田 亜貴
松原小学校 校長	福田 円
松原小学校 教頭	楠見 智弘
和田小学校 校長	立花 寿雅子
和田小学校 教頭	坂田 香織
松洋中学校 校長	吉村 元
松洋中学校 教頭	越本 明伸
松原小学校 学校運営協議会 会長	田端 正幸
松洋中学校 学校運営協議会 会長	塩崎 清則
区長会 会長	田中 一民
区長会 副会長	浦辺 泰司
区長会 代表	井本 善也
区長会 代表	村岡 茂
美浜町教育委員会 教育長職務代理	出口 和幸
美浜町教育委員会 委員	津村 仁志
美浜町役場 副町長	石塚 和夫

【欠席委員】3名

田端 克好（ひまわりこども園 PTA ひまわり会 副会長）

濱田 哲之（和田小学校 PTA 育友会 副会長）

片山 隆（和田小学校 学校運営協議会 会長）

【事務局】

美浜町教育委員会 塩崎教育長

美浜町教育委員会教育課 河合課長、伊藤指導主事（主幹）、徳田係長

（株）地域計画建築研究所（アルパック） 間瀬、清水、増見、城本

【配布資料】

- ・資料1 第1回検討委員会議事録
- ・資料2 小中一貫教育の展開とその成果および課題
- ・資料3 学校づくりはまちづくり
- ・資料4 住民・保護者説明会チラシ
- ・資料5 先進事例視察について

発言者	内 容 (口 述)
1. 開会	
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・ただいまから第2回新しい美浜の学校教育検討委員会を開会いたします。本日は、お忙しいところご出席いただき、誠にありがとうございます。 ・まず始めに、美浜町教育委員会教育長 塩崎善彦よりご挨拶申し上げます。
事務局（教育長）	<ul style="list-style-type: none"> ・皆さま方には、第2回新しい美浜の学校教育検討委員会の開催のご案内を差し上げましたところ、何かとご多用な中にも関わりませずご出席いただきましてありがとうございます。 ・2月24日に第1回の検討委員会を開催させていただきましたが、これにつきましては地方紙でも報道され、住民の皆さまのみならず、ご覧になった方々の反響も大きかったと感じております。 ・その中で生の声として「いよいよ動き出すのだな」「教育長は大変だが、頑張っしてほしい」、あるいは「大丈夫か」というような励ましや心配の声をいただいています。 ・また、この検討委員会の内容は美浜町役場のホームページで公開しておりますので、折を見てご覧ください。今後も逐次掲載してまいります。ホームページだけではなく、名称的なことはこれから検討しますが、瓦版としてペーパーでも随時発信していく予定です。 ・本日の検討委員会は、兵庫教育大学の安藤先生、名古屋市立大学の鈴木先生の講義が中心となります。第1回検討委員会におきまして、私から小中一貫教育の概要や小中一貫教育の導入の方針に至った背景等について説明させていただきましたが、今回はより専門的な立場からお話を伺うことができるものと思います。両先生方にはご多用の中、資料等のご準備をいただきまして、ありがとうございました。この後、よろしく願いいたします。 ・簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の確認
出席委員	(過不足等の申告なし)
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・それでは、配布させていただいております次第に沿って進めさせていただきます。 ・議事に入らせていただきます前に、本日、田端克好委員、濱田哲之委員、片山隆委員より欠席のご連絡をいただいております。また、遅れている方もおられるようですが、現在、委員の出席者は23名ですので、設置要綱第6条第2項に基づき、委員会が成立することをご報告させていただきます。 ・ここからの進行は設置要綱第6条に基づき、委員長であります安藤様をお願いいたします。よろしく願いします。
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・夜7時からという遅い時間ではありますが、いろいろと議論をして、よりよい学校づくりに向けての一步をまた進めたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。
2. 案件	
2-1 前回のふりかえり	
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・それでは次第に沿って、まず「1. 前回のふりかえり」について事務

	局からご説明いただきます。よろしくお願いいたします。
事務局	・配布資料1より前回の要所について
委員長	・それでは、前回のふりかえり及び議事録の確認をお願いしたいと思います。委員の皆さまからご意見、ご質問等はございませんか。
出席委員	・(意見、質問等なし)
委員長	・では、前回のふりかえりと議事録については以上とさせていただきます。最後にまた戻りますので、そのときに何かあればご発言いただきたいと思います。
2-2 勉強会	
委員長	・次に次第の「2. 勉強会」ということで、私と鈴木先生からそれぞれ話をさせていただきたいと思います。
	「小中一貫教育の展開とその成果および課題」
安藤先生	<p>●小中一貫教育の導入理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まず、小中一貫教育がどのように導入されているかということについてですが、毎年、小中一貫教育をしている自治体が自分のところではどのように取り組んでいるかを各々紹介する「小中一貫教育サミット」という研究集会が行われています。そこでは冊子があって「うちの自治体ではこういう理由で行っている」と説明しています。 ・かなり前のことなので今は違うかもしれませんが、そこに集まっている自治体の導入理由を整理すると6つくらいあるのではないかと思います。一つは、学力の向上という教育課程上の理由。それから、子どもたちの発達上の問題、生徒指導上の諸問題、少子化による生活・学習集団の再編など生徒指導上の理由があります。また、教育課程・生徒指導の両方の理由を絡めると、豊かな人間性の育成や、中学校へのスムーズな進学などが挙げられます。 ・特に「少子化による生活・学習集団の再構築」は、美浜もそうですが、少子化になって子どもの数が減っていくと、今まで同学年という横軸で取っていた子どもの社会性を、同学年が少なくなるので縦の学年で取らなければならなくなるということで、いろいろな人と関わることで子どもたちに社会性を身に付けてもらおうという意図もあるのではないかと思います ・そのようにいろいろな理由があり、どこに力点があるかというのは自治体によって違います。だからこそ、私が前回言いましたように、小中一貫教育がそれぞれの自治体によっていろいろと行われているのは、導入理由がそれぞれ違うからだと思っています。 <p>●小中一貫教育が求められる背景</p> <p>【中1プロブレム、中1問題、中1ギャップ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前述の「生徒指導上の理由」については、「中1問題」や「中1ギャップ」という問題があります。中学1年生が中学に入って不適應になることを「中1ギャップ」などと言いますが、生徒指導に詳しい人に話を聞くと夏休み明けに多発するようです。「一次適應」よりも「二次適應」と言われます。 ・「一次適應」はその環境に慣れることで、私たちの感覚でいうと、職場が変わるとか、卒業するなどで環境が変わるときに最初に「気合

を入れて頑張ろう」とするのが「一次適応」です。それに対して長期の休み明けなどに「合わない」「疲れる」と感じるのが「二次適応」と言われます。こういうところでよく起こるということを生徒指導に詳しい先生の話として聞いたことがあります。

【以前と比較して、子どもの成長の早熟化（天笠 2005）】

- ・ もう一つは早熟化の話で、呉市の実戦で語られていた話です。20年前のデータになりますが、戦後50年かけて平均身長が10cm伸び、身長の伸びる時期も2~3歳早くなっています。これは特に戦後のわが国の経済発展に伴って栄養状態がかなり良くなったという要因もあるわけですが、このような変化が6・3と明確に区切ることと合うのかどうかというところからこの話は始まっています。要は、子どもたちが大きく成長する時期と、学校段階の区切りが合っていないのではないかとということが呉市などでは語られていたと思います。

●小学校と中学校の違い

【教育課程・授業関係】

- ・ その上で、私は兵庫教育大学の学部生に「小学校と中学校で何が違うのか」と聞いたことがあります。今ここにいる私たちは大人で、何十年も前に小学校、中学校を卒業していますから、小・中の違いと言われても美化されていて分かりませんし、忘れてしまっていることもあります。大学生にとってはつい6年ほど前の話なので、聞くとその違いがすぐに出てくるわけです。
- ・ (彼らが挙げた内容を見ると) 確かにそうだと思うことや、おまけとされているものなどもあり、教育課程・授業関係でもいろいろな違いがあります。

【生活・環境関係】

- ・ 学習だけではなく、生活・環境関係でも、やはり小学校と中学校では大きく違う点が挙げられます。
- ・ 結局、それらの違いがいろいろな形で今の子どもたちに合っていないのではないかと思われ、そういうところが、小中一貫教育が導入された背景になっているのではないかと思います。

●小中一貫教育制度の類型（文部科学省 2016、p. 20）

- ・ その上で、国のほうでは「義務教育学校」とそれ以外の「小中一貫校」がどのように違うのかということを記しています。
- ・ 義務教育学校は、校長は一人で、それ以外の小中一貫校は、小中一貫とは言いながらそれぞれ別の学校なので、それぞれの学校に校長がおられます。
- ・ 先生方の指導免許については、義務教育学校は併有することが原則であり、今はまだそうでなくてもよいと例外を設けられていますが、原則は小中の免許を持っていることとなっています。しかし、それ以外の小中一貫校は自身が働いている学校の免許だけを持っていればよいとなっています。
- ・ カリキュラムについては、内容の入れ替え等についても、義務教育学校と併設型はよいけれども連携型はダメとされています。
- ・ 標準規模は小中に準じていることとなっています。

- ・設置手続きは、教育委員会のルールだけでよいのか、市町村できちんとルールを決めなければならないのか、そういうところで制度的な違いがあります。
- ・私がおもしろいと思ったのは、義務教育学校で免許を併有しているある自治体の先生の動きで、その人は小学校4年生か5年生から中学1年生まで持ち上がっていました。その人は小中の免許を持っているのでそれができたそうです。ただ、本当は中学2年生まで持ち上がる予定だったらしいのですが、校内事情の都合でもう一度小学校に戻ったそうです。ご本人は担任する子どもたちをずっと見てきたから中学2年生くらいまで持ち上がりたかったようで、そういう話もあったということ、ある義務教育学校の校長に伺いました。このように小中の免許を持っていると、連続的な指導も可能になります。このような違いがあります。

●小中一貫教育に関する諸調査の結果

- ・ここからは、文部科学省が過去2回ほど行った調査のデータを提示して、そこから小中一貫を見ていきたいと思えます。

【小中一貫教育の主なねらい】

- ・自治体に対する調査の結果によると、小中一貫教育のねらいとして一番高いのは、学習指導上や生徒指導上の成果を上げることですが、それと同じくらい高いのが、先生方に9年間で子どもを育てるという意識を持ってもらいたいということでした。それが自治体のねらいとしてはあるわけです。これは、市町村教育委員会が小中学校を持っていますから、「この町で、子どもたちを義務教育の間にどう育てるのか」という意識を持ってほしいということです。小学校は小学校、中学校は中学校ではなく、義務教育として子どもたちをどう育てるのかという視点を持ってほしいという思いが見て取れます。

【小中一貫教育のこれまでの取組の総合的な評価（成果）】

- ・そして「やってみてどうですか」と問うた結果、成果があると感じているところが多いように数値から読み取れます。

【成果1：学習指導等】

- ・特に効果があるのはどこかということで、ポイントが高い項目を選んで赤いラインを引いてみました。私が勝手に選んだので、もしかすると違うところにももっといろいろな意味があるのかもしれませんが、「学習規律・生活規律の定着が進んだ」「学習習慣の定着が進んだ」「学習意欲が向上した」「授業が理解できると答える児童生徒が増えた」というところに8~9割くらいの回答が集まっています。
- ・私が以前学ばせていただいた自治体では、小学1年生~中学3年生までの間の学習習慣・生活習慣の手引きみたいなものを作っているところもありました。そこには「小学1年生はお家でこのくらいの時間は勉強しましょう」とか「こういうことをしましょう」と書かれていて、ページをめくると2年生、まためくると3年生となっていました。そういうものを作って、町の中で義務教育を進めていったというところもありました。
- ・それから、これも別のところに関わった事例ですが、その自治体が独自で行ったアンケート調査でも「子どもたちが授業を理解できる

ようになった」という回答が出ていました。これは小中学校の先生と一緒に指導することによって、授業が何らかの改善をされたということだと思われます。このように日々効果が出ているところがあります。

【成果2：生徒指導等】

- ・じつは成果として高く出ているのは、生徒指導上のほうが多いようで、「児童生徒の学習生活への満足度が高まった」とか「児童生徒の規範意識が高まった」という回答が多く出ています。
- ・それから「思いやりや助け合いの気持ちが育まれた」とか「上級生が下級生の手本になろうとする意識が高まった」「下級生に上級生に対する憧れの気持ちが強まった」という成果も挙げられており、この辺りが前述の「見る・見られる関係」としてロールモデルになっているようです。「中学生が驚くほど優しくなった」という校長の話をよく聞くのは、このような回答に裏付けされていると思います。
- ・また、「児童生徒子の交流が増えた」ということも挙げられています。
- ・そして、「中1ギャップ系」の成果と言えるのが「中学校への進学に不安を覚える児童が減少した」とか「中1ギャップが減った」という回答が寄せられている点です。

【成果3：教職員の協働等】

- ・それから、先生方の働き方ですが、「小中学校の教職員間で協力しよう」とか「互いの良さを取り入れよう」という意識が高まったという回答がありました。
- ・「教員の指導方法の改善意欲が高まった」とか「小学校教職員の間で基礎学力保障の必要性に対する意識が高まった」という回答もありました。
- ・また「小中学校共通で実践する取組が増えた」ということで、互いによい影響を与えた様子も見て取れます。

【成果4：その他、学校運営等】

- ・「その他、学校運営等」では、「保護者の学校への満足度が高まった」ということも報告されています。私が以前関わったある自治体の調査では、保護者の小中一貫に対する期待として「9年間の一貫した指導」や「先生方の連携」というところに結構な回答が集まりました。やはり保護者からすると、自分の子どもが9年間きちんと先生方の協力体制の下で見てもらえることが安心感につながっているということがよく分かる結果でした。そういうところが国の調査でも出ているところかと思います。

【課題1】

- ・しかし、成果もあれば、もちろん一定程度の課題もあります。中には大きな課題もありますが、成果に比べて課題の回答の%はやや低いように思われます。

【課題2：学習指導、生徒指導等】

- ・どのようなところに課題があるかと言いますと、やはり「9年間の系統性に配慮した指導計画の作成・教材の開発」の難しさや、「児童生徒間の交流を図る際の移動手段・移動時間の確保」の難しさなど、こういうところに課題が出ています。
- ・指導計画の課題については、そもそも9年間の教育課程を作ること

が大変です。小学校と中学校では内容自体が違いますし、生活ベースの小学校教育とアカデミックな世界に入っていく中学校では教育課程がすぐにつながるものではありません。そういう意味では、やはり難しさが出てきます。

- ・移動手段や移動時間の確保については、先日ある自治体の小中一貫の会議に参加したところ、道路を挟んで目の前に学校があってもやはり移動は難しいと言われました。なぜ難しいかという、大人が移動するなら問題ないのですが、子どもが何十人も小学校と中学校の間を移動するのは安全確保の問題があります。大人たちならそのまま道路を渡れば済む話ですが、40人の子どもたちを渡らせるのはなかなか大変であり、難しいわけです。そうなると、やはり多くのところで言われている施設一体型、もしくは同じ敷地の中につくるという話になります。このように、道路を挟むと移動が難しいという問題はよく聞きますので、この辺りも今後の検討課題になるのではないかと思います。

【課題3：教職員の負担等】

- ・また、先生方の負担も大きいです。「打ち合わせ時間の確保」や「小中合同の研修時間の確保」の難しさ、「教職員の負担感・多忙感の解消」になかなか結び付かないという問題もあります。これらをどのようにうまく解結するかというのが重要ではないかと思います。
- ・よく行われているのが、夏休みの合同研修です。また別の自治体の話になりますが、施設が離れている学校の場合、今はChat機能等を使ってwebで情報のやり取りができますので、普段はそのような機能を使って情報共有をしている学校も多いようです。多分、和歌山県の学校もそういうものは入っていると思いますので、そういう機能を活用して普段はやり取りして、時間が取れるときに集まるようにするという事です。
- ・あとは、小中に関わることは、年度の最初に「この日は合同で行う」と決めておくことが大切です。私も兵庫県内のある学校に呼ばれるときは、「6月に第1回小中合同研修会を開くので来てほしい」という打診が1月頃にはもう来ています。小中合同に関わる部分は、すでにその時点で決めているわけです。このようにすると、この辺りの問題は解消できるのではないかと思います。
- ・ただどうしても、調整ごとに関わる負担感・多忙感の解消は難しい部分もあるかもしれません。

【系統性の確保】

- ・では、どのように9年間の教育課程の一貫性を確保するかということですが、それについては、まず学校行事を一緒に行うことがよいのではないかと答えている自治体が多いようです。
- ・また、前述の「学習規律・生活規律」の一貫性や、または子どもたちの様子を小中の先生方が一緒に分析するという事も行われています。
- ・その他、「教育課程を作る」とか「小中学校共通の学校経営理念の設定」「9年間をひとまとまりと捉えた学校教育目標の設定」など、この辺りは実践家の先生方に聞いたところではかなり重視されています。小中でどういうグランドデザインをつくるのか、それがなけれ

ばならないと言われている方もおられます。

●調査結果にみる小中一貫教育の成果

- ・小中一貫教育の成果については、学力の定着傾向にあることは文部科学省の結果にも出ていますし、私が関わった調査でも分かっています。
- ・生徒指導の成果としては、学校不適應の改善や異学年交流による児童生徒の成長を実感されている例もありました。
- ・運営上の成果としては、先生方の協働によって指導力が向上しているということも聞いています。
- ・その他の成果としては、保護者や地域の満足度の向上、要はその地域の学校教育に対する満足度も高まっていると言われています。
- ・このように見ると、小中一貫教育は義務教育の一定程度の質の向上に貢献している仕組みと言えます。

●調査結果にみる小中一貫教育の課題

- ・次は課題ですが、カリキュラム上の課題として早修型のカリキュラムの是非が挙げられます。これは小中一貫教育で何をするのかというところが問われる問題で、やり過ぎると「中1ギャップ」から「小5ギャップ」へと新たな「ギャップ」が発生します。私が以前に関わった調査では、小学5年生から中学校的なことをし過ぎたために、小4から小5に上がったときにギャップが生じていました。やり過ぎると、あまりよくないということです。
- ・ですから、そこは何をするのかということ十分に考えなければなりません。中学校に上がる時が大変だからといって、中学校を何もかも先取りすれば慣れるだろうという問題でもないということです。ここは、本当に何をするかが問われます。
- ・逆もあります。「中1ギャップ」がなくなったお陰で、中学校進学が通過儀礼の意味を持たなくなりました。通過儀礼というのは、人生の節目に「自分は今までとは違う」「大人になった」ということを実感する機会であり、私たちはそれを、たとえば小学生から中学生という新しいステージに上がる入学式などで感じるわけです。
- ・この通過儀礼がなくなるとどうなるかという、ある学校の先生は「中学生が中学生らしくなくなって、小学校7年生という感じでフニャフニャしている」と言われています。したがって、そこを分けるとか、小中一貫でも「あなた方はもう違う」という、一応の儀式的なものは必要なのです。先ほど事例で「別れのない卒業」と言いましたが、卒業式のようなものを行うと違ってきます。そのような自分の意識を変えるような象徴的な何か、そういうものはカリキュラム上で入れたほうが通過儀礼という点で意味があると思います。
- ・また、運営上の課題として、先生方の協働体制をいかに構築するかということも問題となっていますので、時間の確保や負担感なども解決する必要があります。
- ・いずれにしても、小中一貫教育で「何をするのか」が問われますので、カリキュラムがカギを握るのではないかと思います。

	<p>●小中一貫校の強みと可能性</p> <p>【子ども同士の育ち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設が一体型に近づくほど、特に日常的に学校生活を共にすることの意味が重要で、ここから学ぶことは大きいのではないかと思います。「見る一見られる関係」というところでしょうか。 ・要は、リーダーシップとフォロワーシップを学んでいくことが非常に重要だということです。リーダーシップというのは、フォロワーの経験をしていなければ身に付かないと言われますので、このようなことを日常的に獲得して、それを繰り返し、再生産していくということがより重要ではないかと思います。 <p>【教職員の協働】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生方の協働も強みです。これには子どもを長期的な視点で見ることの意味があります。小中の良さを生かした仕事の進め方が、先生方の職能成長にもつながるといえることです。ですから、先ほど事例を紹介したように、必ずしも小学校の先生が中学校まで上がればよいということでもないし、中学校の先生が逆に小学校に降りている学校もありますが、必ずしもそれをするだけで意味があるのではなく、やはり9年間の子どもたちの成長を知ることが、何よりも先生方にとっても大きな意味があるということです。 ・それが翻って、自分が専門として教えているところの教師の仕事の向上にもつながるのではないかと、結局は自分の職能の向上にもつながっているのではないかと思います。 ・以上で私の話を終わりたいと思います。ご清聴いただき、ありがとうございました。 <p>●質疑応答</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今の私の話にご質問等があれば、お願いいたします。
委員 A	<ul style="list-style-type: none"> ・小中一貫の9年間の系統的なカリキュラムづくりが大事だけれど、それが難しいという話がありました。今、学習指導要領の改訂の時期ですが、国には9年間を通した学習指導要領を作ろうという取組はないのでしょうか。現場に任されるのでしょうか。
安藤先生	<ul style="list-style-type: none"> ・じつは、現在の指導要領の時点ですでに小中一貫や中高一貫による教育課程の接続が言われています。 ・教育課程の接続性についてはかなり前から言われていますが、日本の教育課程はスパイラル型カリキュラムで、小学校で行った授業の内容が中学、高校でも出てきたりします。よく言われるのが「歴史」で、私たちはなぜか日本史を3回も学びます。ただ、段々と難しくなるし、量も増えていきます。これも一貫性としては接続を図られているわけです。 ・難しいのは、小学校で学んで、中学校ではなくて、高校で戻ってくるというような教育の内容です。その辺りは教科によっていろいろと違います。 ・算数・数学はかなり系統性が強いので、9年間一貫したものとして考えられているように思います。 ・この難しさは、小学校と中学校で目的が違うところにあります。生活に根差した教育の中身を重視する小学校と、よりアカデミックに

	<p>なる中学校の違いです。ですから正直に言うと、教科名も教科指導の方向も一緒の中高のほうが接続しやすいわけです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ただ国としては、今、義務教育の目標規定もあるぐらいです。今までは小学校と中学校の目標規定しかなかったのですが、今は義務教育の目標規定がまずあって、それを踏まえて小学校と中学校の目標が法律で定まっています。そういう意味では、小中一貫の眼差しというのがあって、国としても、特に義務教育を拡充、充実させるという方向に動いているのは間違いないところだと思います。
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・その他、何かございますか。
出席委員	(その他、質問等なし)
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐに質問するのは難しいかもしれませんが、後でまた戻りますので、一旦ここで終わりたいと思います。ありがとうございました。 ・続いて、鈴木先生にお話しいただきます。よろしくお願いします。
	<p>「学校づくりはまちづくり ーみんなで創る美浜の未来ー」</p>
鈴木先生	<ul style="list-style-type: none"> ・私の話は、現実の建物をどうつくるかというところとどう結びつけるかという話です。今年の前半はソフトの検討ということですので、本日はスタート時という位置づけで聞いていただければ結構かと思えます。 ・美浜の学校づくりについては、前回、松洋中学校を見せていただいたときに感じたものがあります。私も随分といろいろな学校を見てきましたが、このように海あり、山あり、海岸あり、松林ありという立地は日本中どこにもありませんし、世界でも、もしかするとあるかどうか、少なくとも私は見たことがありません。これだけで凄い財産だと思って見ていました。 <p>●令和 15 年春開校に向けた 7 年間の旅の出発にあたって</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本日は、令和 15 年開校に向けて動き出そうという、そのスタートですので、今から 7 年間かけでどのようにこの検討を進めたらよいかという話をしたいと思います。前半はどのような姿勢で検討すべきなのかという話ですが、今年と来年の 2 年間で一番大事だということです。長いですが、前半の 2 年が相当に大事だと思っています。 ・それから 2 つ目に、新しい学校は今までの学校のアップデートという感じではなく、新しいハードとソフトが必要ではないかと考えています。そのためには、ここにおられる「チーム美浜」と勝手に名付けさせていただきましたが、大人たちが、本気で取り組まなければならないのではないか、皆さんが一致団結して取り組まなければならないのか、皆さんが一致団結して取り組まなければならないのか、強い言い方をすれば、美浜の未来はないと言えるのではないかと思います。 <p>●山里に点在する 5 つの小学校の統合計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に、私がかかなり以前に経験したおもしろいエピソードから紹介したいと思います。 ・愛知県の山奥に 5 つの小さな学校があり、1 つの学校には 10 人くらいしかいませんでした。それで中学がどんどん小さくなりますから、大人たちは「早く統合しなければだめだ」とずっと考え続けていま

- した。しかし、考え続けて20年経っても、どこにしようか、どうしようかという話ばかりで、いつまでたっても結論が出ませんでした。
- ・それがいよいよということになったとき、大人たちがこのような会議を進行していた中で「子どもたちの話を聞いてみよう」ということになりました。それで、総合学習の時間に「学校づくり」を一度問いかけてみるということになったので、お手伝いをしたことがあります。
 - ・「新しい学校ができれば、どのような遊具があるとよいか」と低学年に問いかけたわけですが、そのときの様子を写真で紹介しますと、子どもたちが色の違うジャージを着ているのが分かると思います。これは5つの学校が集まっているという状況です。
 - ・じつはこのとき、高学年のあるチームが「山の中に高層ビルを建てたい」という案を出しました。子どもだから実現性のない夢みたいなことを言っていると言えばそれだけの話ですが、よくよく聞いてみると、「村がどんどん縮小して、いずれ無くなっていくことを僕たちも感じている。話題になるような学校をつくれれば、そこに子どもたちがきて、まちが発展するのではないか」という理屈だったのです。それを聞いた大人たちは驚いて「皆で長々と議論している場合ではない、早く取り掛からなければならぬ」という気持ちになったそうです。そういうきっかけとなった高層ビルの提案でした。
 - ・もっとおもしろかったのは、別のチームが考えてくれた円形の校舎です。じつは円形の校舎というのは、昭和30年代頃に全国で100校ぐらいできているのですが、彼らはそういうことを知りません。それで「なぜ円形にしたのか」と聞くと、「6学年が仲良く真ん中を向いて、一緒に勉強したいから」という答えが返ってきました。これは校舎の形に子どもたちの気持ちが表れているということであり、「なぜ、そうしたいのか」と聞くと、「なるほど、そういうことか」というものが見えてくるわけです。じつは、安藤先生にお話しいただいたカリキュラムや教員に関するいろいろな事柄とは別に、学ぶ環境そのものが大きな影響を与えることを私はいつも痛感しています。
 - ・結局、この学校は巴ヶ丘小学校という木造の小学校になりました。2005年に愛知で「愛・地球博」という万博が開催されましたが、そのときは市民参加がテーマになっていて、木をたくさん使うということで、愛知万博で使った木をここでリユースしています。
 - ・そういう学校ですが、高層の話はどうなったかという、子どもたちが高いところに昇りたいというので、真ん中に少しだけ高いタワーを実現しています。円形にするのはなかなか難しかったのですが、それでも隣の教室とつながるようなオープンスペースをつくることによって実現していきました。
 - ・木造の話は機会があればまたお話ししますが、今はまたコンクリートではなくて木を使おうという動きもあります。

●学校づくりは地域に投げかけられた将来のまちづくりの試金石

- ・学校づくりというのは、地域に投げかけられた将来のまちづくりの試金石ではないかと思っています。まちの中に2つの小学校と1つの中学校という本当に大事な学校が拠点としてあるならば、これを

次の20年、30年、40年使っていくわけですから、それはまちにとって大きな財産になると思います。

- ・これをどのように新しい時代の流れに乗ったもの、あるいはリーダーシップをとれるようなものにしていくのか、それを考えるためには、まさに創造力を働かせるしか仕方がないという大きな宿題をいただいたということだと思います。

【25年後、50年後を想像して】

- ・インターネットで調べた美浜町の人口推計を見ますと、25年後の人口は今の6割ほどになりそうだと見られています。放っておくとどんどん人口が減っていくということです。
- ・そういう中で、皆さんは25年後にどのような生活をしていきたいか、あるいは美浜町はどのようになりたいか、それを考えるのはかなり創造力を働かせなければ難しいのですが、それでも何かぼんやりと「概ねこういう方向に向かってほしい」という共通するイメージを構築したい、そう思っています。そうでなければ、同じ美浜町に住みながら、同床異夢ではありませんが、皆が違う夢を持ってしまい、最後はバラバラになってしまいます。それではだめだと思います。
- ・先ほどカリキュラムの話もありましたが、目標をきちんと立てていれば、手段は何とかなりそうだと話も伺いました。少し大げさな話になりますが、やはり町がどうあるべきかということを考える非常に大事な機会ではないかと思っています。

【町の将来を考えながら「学校づくり」の課題に取り組むのは誰か？】

- ・そして、町の将来を考えながら「学校づくり」の課題に誰が取り組むのかという話になります。「教育長さん、大変ですね」という話をされましたが、正直なところ、教育長にお願いするわけにはいきません。頑張っただけはいただきたいのですが、教育長だけではできないと思っています。
- ・いろいろな関係者が、それぞれ役割分担をしなければなりません。行政にはリーダーシップをとってもらわなければなりませんし、専門家の方々にはアドバイスをいただかなければなりません。また、住民や保護者の方々、教職員の方々など、いろいろな立場の方々と一緒に取り組んでいかざるを得ません。
- ・これまでの「学校づくり」を見ますと、たとえば昭和30年～40年頃は、教育委員会の方々が標準設計の図面を少しアレンジすると学校ができていました。つまり標準設計という図面ができていて、それを並べれば大体できてしまうという状況だったわけです。しかし、今はそういう時代ではありません。皆で知恵を出すしかないのです。
- ・このときに、学校そのものを中心になって考えていく行政の方々、あるいはある団体が来ると設計者が考えることになるわけですが、その人たちが学校を実際に使う教職員や子どもたち、保護者や住民の方々などのことを考えながら学校の形を考え、そして専門家が助言をし、できた図面に従って施工者がつくっていくという流れになります。
- ・そのそれぞれに役割があって、何となく行政が中心になって設計図をまとめ、「このようにしますが、いいですか」「大丈夫ですね」と

意見を聞きながら一応そのように進めていくわけですが、説明する側とそれに対して意見をやる側という、対岸にいるようなやり方では、新しいものはできないだろうと思っています。

【従来の学校建築の設計プロセス】

- ・従来の学校のつくり方は、プロセスから説明しますと、構想段階は行政の方々が作られます。そして計画段階に入ると専門家が入って「敷地をどうするか」「予算はどのくらいか」「どのくらい時間がかかるのか」という話になり、続いて設計者が入って具体的に図面を描き、図面ができると施工が始まり、竣工して皆さんが使うという、そういう流れになっています。
- ・このようなプロセスで、ステークホルダーの皆さんは別々に動くのではなくて、一丸となって取り組まなければならないと思っています。先ほど2年間で大事だと言ったのは、この構想・計画という図面を描く手前の段階で、どういうものをつくるかということ全体を共有できなければ、先に進んだときに不平不満が出てくるからです。「そんなはずではなかった」「なぜこんなことになったのか」というふうになりがちです。したがって、良い学校をつくるためには、構想が非常に大事だと思っています。
- ・美浜町の総合計画にも住民参加が高々と謳ってありましたので、ぜひ皆さんも参加しながら一丸となって、この構想・計画のところに気持ちを込めていくという、そういう動きがあるとよいと思っています。

【能動的な学びのプロセスに飛び込む試み】

- ・それでも、「そのような学校づくりなどしたことがない」と言われるかもしれませんが、それは当然です。早く専門家が図面を描いてくれたら、それでよいのではないかというふうになりがちですが、やはりそうではなくて、「これからどういうプロセスを踏むのか」ということや、「住民はこういう力を持っている」ということを行政にきちんと伝えることが大切です。
- ・それから、このような話し合いも必要で、グループワークでワークショップをしたりすることもあります。意見の言いやすい雰囲気を作りながら皆で高めていくという「学びのプロセス」も大切です。私たちにとっては大きな宿題だと思いますので、その宿題を解決するための手法を考えていかなければならないということです。

【『ナー ज्याの5つのがっこう』】

- ・話題を変えますが、数年前、おもしろい絵本が出版されました。その中では、各国で小学生時代を過ごしたナー ज्याという人が、国ごとに学校の教室でどのような机の並び方をしているかということを紹介しています。
- ・それによると、日本は碁盤の目のような整列型です。ロシアは2人机です。そういう並び方です。フランスは口の字型、アメリカは真中にソファなどのリラックスできる場所があります。イギリスはグループワークになっているなど、それぞれの国によって机の配置が違います。これはどのように授業が組立てられているかということと密接に関係しているので、非常に興味深いところです。
- ・じつは一時、世界がどのような授業を展開しながら学校をつくって

いるのかということを見て回ったことがあったのですが、前述のナー ज्याさんの絵本に従うと、個人机を並べた整列型で、先生が一方的に伝えるという場面があまり見られませんでした。もちろん海外の方がよいかどうかは私には分かりません。しかし、こういう選択肢があるということは分かります。こういう選択肢があって、こういう見方がある、たとえば写真のアメリカの女の子はカーペットに寝そべて授業を受けています。これを日本で実践したらとんでもないことになると思いますし、「何をしているのか。きちんと座れ」と言われると思います。ところが、「この子はこういう姿勢でリラックスして勉強しているのだから、何の問題があるのか」ということです。

- ・私が学校のことに興味を持った一つの事例があります。1978年のことなのでかなり以前の例ですが、愛知県東浦町というところに緒川小学校という学校ができました。当時「壁のない学校」と言われましたが、オープンスクールというアメリカやイギリスで行われている事例を参考にして設計者がつくってしまったものです。これに先生方が驚いて「こんな開放的なところで授業などできない」と最初は大混乱だったのですが、与えられた学校で授業をするしかないということになり、ここなりのカリキュラムを作りながら新しい教育に取り組んでいったという事例です。
- ・次はスウェーデンの事例ですが、スウェーデンは9年一貫教育を行っており、個別のグループ学習の閉ざされた部屋をつくって勉強しています。
- ・学校ではありませんが、和歌山県は最近、和歌山市の駅の前の図書館や海南市にできた図書館など、非常にこれまでの図書館とはイメージの違うものをつくっています。とてもリラックスできる家具が入って、寝そべることのできる場所もつくっていますし、個別でリラックスできる場所もつくっています。何となく「学び」というものがそういう形に変わってきているように思います。

●学校建築に対する疑問

【「こういうものだ」から「できればこうしたい」へ】

- ・いよいよ学校づくりをしようという話になりますが、そのとき最初に皆さんから出てくるのは「学校とはこういうものだ」という話です。「大体決まっているではないか」という声が出てくるわけですが、それをもう一度、本当に「こういうもの」でよいのかどうかを考えてほしいと思っています。一度真っ新にしてもらい、「できればこうしたい」「こうありたい」というものを皆でフリーディスカッションして、そこで選択していく過程が必要だと考えています。

【学校建築の7不思議】

- ・「学校建築の7不思議」というものがあります。
- ・一つは、教室は南側で左側から採光し、廊下は北側にあるというのが定番とされていることです。もしも建築家が教室を北側につくろうとしようものなら「何を言っているのか」「教室は南側と決まっているではないか」「なぜ北側にするのか」と大騒ぎになります。
- ・ところが実態を見ますと、南側の教室で授業をしているとき、光が

入ってくる側はすべてカーテンを閉めています。南側は直射日光が入ってくるので、手元が眩し過ぎるというわけです。これについては、気候が変わったという話もあると思いますが、以前のように風通しをするような時代ではなくなって、エアコンを使うところも増えていますので、こういうことも見直しが必要だと思います。

- 教室に前と後ろがあるのも当たり前だと思われるかもしれませんが、じつは多くの建築の中で部屋に前と後ろがあるものはあまりありません。教室だけです。教室に前があるのは、やはり先生のほうを向きなさいということだと思いますが、先生のほうを向くのではなく自分を見るなら前でなくてもよいはずです。
- また、教室の天井の高さは建築基準法で 3mと決まっています。ただ、今これは緩やかになっていて、一部なら少し低くしてもよいし、高くしてもよいとなっています。これは、3mでスライスされた教室に長くいると息苦しさがあるからで、それを高いところがあったり、低いところがあったり、子どもの目線に沿った空間があったりというように変わりつつあります。そういう目線で見てみると、学校というのはかなり画一的ではないかと思います。
- 机と椅子の生活というのも不思議です。今は個人の住宅も和室が無くなりつつありますが、それでもやはりリラックスするときには床に寝そべったり、座ったりすることがあります。しかし、学校に来るとそれが許されません。椅子に腰を深く掛けて、背筋を伸ばして座ります。それが当然とされているのかもしれませんが、ある子たちにとってはそれがとても苦痛になるということです。
- このようなあれこれを、一度「どうしてそうだったのか」「どうしてそうなるか」というところに疑問を差し込んでいただくとよいのではないかと思います。

●学校づくりの目標と課題

【学校づくりの目標と課題の把握】

- 学校づくりの目標については、ハードとソフトをセットで考えます。そういう形で今はスタートしていますので、とてもよいと思いますが、中身だけではなくてハードも一緒に考える、ハードだけではなくて中身も一緒に考えていくということで、皆さんで共通した意識を持っていきたいと思っています。
- それから「いち早い課題整理と目標設定」も挙げています。どのようなことが課題として挙げられるかということ、皆で早く出したほうがよいと思っています。

【学校づくりの目標】

- 繰り返しになりますが、「どのような学校をつくりたいですか」と問い掛けると、皆さんは今の学校を思い浮かべながら「トイレが汚いからきれいにしたい」とか「教室が暗いから明るくしたい」など、現状をベースにした話をされがちです。それは言わなくても設計者がきちんとやってくれる分野です。
- そうではなくて、「質的にもっとこうしたほうがよい」という話をきちんとしていくということです。それが将来に向けた構想とソフトウェアとハードウェアをきちんと考えていくことになります。

【小学校と中学校の一体的な計画事例】

- ・私に関わった、小学校と中学校を一体的に計画した事例がいくつかあります。ただ、このような事例は、この方法でやればうまくできるということはなかなかなくて、小中一貫校だけではありませんが、いろいろな学校づくりの中で、その学校ごとにきちんと押さえないメインとなるテーマがあります。
- ・たとえば、地域施設と複合するという課題が出たときにどうするのか、ここでそういうことがあるかどうかは分かりませんが、地域の別の施設と一緒にするという事です。
- ・それから、住民の皆さんと一緒に学校をつくり、なお且つ最終的に住民の皆さんがその学校の中に拠点を持つような、常駐できる場所をつくろうという形で進むケースもあります。
- ・また、木造がよいということで、木造でつくるにはどうしたらよいかと考えたときに、環境共生型のエネルギーを消費しないような学校をつくることをメインテーマにするというケースもあります。

【課題の広がり】

- ・学校づくりをするときは、たくさんの課題を取り上げなければなりません。たとえば、学校そのものをどうつくるかという話と、それに対して、地域とどういう関係を持たせるかという広がりの中で考える軸を横軸とし、縦軸にハードとソフトを置いて、学校側と地域側とハードとソフトの4つの事象で整理すると、いくつかの課題が出てきます。こうしたことを皆さんで取り上げながら、議論していくべきではないかと思っています。

【多様化する学校の計画条件】

- ・それから、建築に求められるいろいろな事柄があります。
- ・一つは、社会の変化によって、統廃合をどうするか、建物を長寿命化させるにはどうしたらよいか、省エネルギーの学校をどうつくっていくかという課題、エコスクールの考え方などの課題です。
- ・安全性の確保という面では、たとえば地域の皆さんが学校に入るときのセキュリティの問題や、水害、特に津波の問題をどうするかなどの安全性の問題があります。
- ・地域との協働については、多くの皆さんが入り込めますので、場合によっては高齢者も来るでしょうし、車椅子の方も来るかもしれません。また今直面している問題として、性を明確化していない人たちも一緒に巻き込みながらどうするかという課題もあります。
- ・教育そのものの変化もあります。前述のように黒板を使って授業をするだけではなく、今や電子情報でも授業をするという展開の中では、教育は今までと全く違うものになっていくだろうと思います。

【学校組織の再構築】

- ・また、先ほど安藤先生が言われたように、小学校6年生+中学校3年生=9年生ではありません。私も、小学校の先生と中学校の先生が互いに「一緒になれるわけがない」と言い合っている場面を何回も見ました。「職員室を一つにして、そこに小学校の先生、中学校の先生が入る」と説明した瞬間に「それは無理だ」「そんなことができるわけがない」と大騒ぎになります。
- ・やはり「どういう問題があるのか」「なぜそれがダメなのか」という

ことをきちんと洗い出して、皆で議論しなければできないだろうと思っています。

- ・地域と一体となった学校運営体制も必要です。これについても地域との関係が増えたという報告がありましたが、学校の先生だけではできないことも多く、過大な仕事を請け負い過ぎているという気がします。これについては、自主的に地域の皆さんが参加してくれる仕組みをうまく取り入れることで、一体になった子どもたちの環境づくりができるのではないかと思います。
- ・豊田市のある学校で PTA を PTCA に変えて、「義務の PTA を止めて、やりたい人だけでやりましょう」と言われた校長がいましたが、それを実行したところ、うまくいっているようです。学校の清掃も運動会の手伝いも、義務ではなく、したい人がするようになっていて、そういう方法で地域の一体性を作り上げている事例です。

【学習環境の再構築】

- ・そして、一番大事なものは、学習環境をどのように再構築していくかという話です。今までの教室とは違うことを考え始めなければなりません。どのような家具をセッティングして、どういう場をつくっていくと、子どもたちが意欲を持ってくれるのか、さらに意欲を持つだけではなく、「こういう環境ならおもしろい」「やってみたい」と思えるような場所づくりが必要です。
- ・ですから、クラス単位の閉ざされた教室で先生が特定の集団を教えていくというスタイルではなく、教室がオープンスペースに一体的に広がって、なお且つ、学級担任だけではない、学級を超えたチームとして、学年で教育を受けるようなスタイルをとると、それにふさわしい教室になっていくと思います。
- ・さらに言えば、学級の枠組みが緩やかになると、教室の作り方もかなりオープンにしなければ運営ができないだろうと思います。

【自由進度学習への取組】

- ・私が住んでいる名古屋市は 300 校近くも学校がありますので、新しい学校をつくるのはとても大変ですし、予算もありません。そのため、昔ながらの古い学校で、新しい教育を展開したいということで、いくつかの学校が動き始めています。
- ・名古屋市立山吹小学校の例を見ますと、本当におもしろくて、今までの教室とは全く違います。廊下で勉強している子どもがいたり、先生の机が教室によって全く違うところに置かれていたり、自分たちで学ぶコーナーをつくったりしています。ここは非常に参考になりました。

【アクティブラーニング室の設置】

- ・岐阜市では、一つの教室をアクティブラーニング室にしています。このやり方がよいのかどうかは分かりませんが、全部をアクティブラーニングにしなければならないはずなのに、一つの教室だけなので変だとも思うのですが、それでもそういう場をセッティングして自由に家具を使える場所をつくって運営しています。この事例を見てもとても参考になります。建築ではなく、家具そのものが大変な可能性を秘めていると思います。

【校舎の動線上に図書室を配置】

	<ul style="list-style-type: none"> ・次は、校舎の動線上に図書室を設けている事例ですが、図書室は学校の端にあって鍵がかかっているのではなく、昇降口の真ん中に図書室があって、鍵がかからない状態で本が置いてあります。本が無くなったらどうするのかという話がありますが、それは平気です。平気という大変ですが、そういうルールで動けばその問題は解決されるということです。 【特別教室のオープン化、特別支援教育のための場づくり】 ・特別教室が教科割になっている事例ですが、もしかすると教科割の教室でなくてもよいかもかもしれません。 ・また、外部の空間を使っているケースもあります。 ・特別な配慮を要する子どもたちのためのスペースも考えなければなりません。かなりの子どもたちがそういう支援を求めていますので、その辺りも皆で一緒に考えていかなければならないと思います。 【教師が楽しく元気に働く職場環境】 ・一方で、先生方はとても狭い部屋で仕事をしておられます。民間を見ると、民間のオフィスは新しい環境をつくり始めています。学校の先生方こそクリエイティブな仕事をしていただくには、本当にそういう部屋になってほしいと思いますが、先生方は「私たちはどうでもいいから、まず、子どもたちのために考えてほしい」というような発想になりがちです。しかし、学校の先生方、特に小学校の先生は女性が増えていますので、女性の先生方のためのスペースも発想の中には入れていかなければならないと思います。 【災害時に対応した学校施設】 ・災害の話が一番重要なので、いつかまた話をさせていただきたいと思います。 <p>●チーム美浜の本気度と団結力が試される</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に申し上げたように、皆さんと一緒に考えていくことを、キックオフのミーティングで皆さんに投げ掛けたいと思っています。 ・コミュニティスクールという考え方もあります。 ・試しに AI GEMINI に「松洋中学校の敷地に小中一貫校を建設する場合の完成予想図を描いてほしい」と言ったところ、30秒で描き上げました。今やこういう技術は凄い進歩を遂げています。ただし、これには何の魂も入っていません。 ・要するに、美浜町としてどういう学校をつくりたいかという根っこの部分をきちんとつくるのが重要なのであり、そうすれば技術はいくらでもあるので、予算の話はあるとしても、どのような学校でもできると思います。 ・そういう意味で、皆さんにはチーム一体となって、この難しい課題に取り組んでいただければと思います。以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。
委員長	<p>●質疑応答</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それでは、今の鈴木先生のご講義について、ご質問やご意見はございませんか。
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・私から感想を述べさせていただきますが、私が鈴木先生のお話で非常に共感できたのは、誰かがつくってくれる、人任せの学校づくり

	<p>ではないということです。皆さん方が当事者として、この町の学校をつくるわけですから、皆さん方の「こうしたい」とか「こういう学校がいい」という合意をここから作っていかねばなりません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特に思ったのは、先生方の職場環境です。「子どものためなら」という話がありましたが、学校の先生はもっと自分たちが働く環境について意見を言わなければならないと思います。こういう話をすると、教師が楽をするようなイメージを持たれがちですが、そうではありません。先生方がきちんと働けなければ、子どもにとってもよくないのです。 ・今、私は別件の研究をしています。ネット上では「教師が楽をする改革ではないか」とよく言われます。しかし、それは違います。楽をするわけではなくて、先生方の働き方を変えるということは、結局、それが子どもたちに返るのです。そのためには、先生方も意見を言わなければならないと思います。 ・先生方ご自身が学校を実際に運用し、そこで子どもたちに関わっていくわけですから、これは学校の先生方も意見を言わなければならないし、それぞれの地域の方々も自分たちの町の子どもたちがよりよく学べるための施設として考えて、最後に鈴木先生が言われたように、魂を込めなければならないと思います。 ・本日はキックオフの会ですので、次回以降は皆さん方のいろいろなご意見を踏まえながら、少しでも美浜らしさというか、美浜にしかない学校教育をつくっていけるような議論を展開できるとよいと思います。鈴木先生のお話を伺って、改めてそう思いました。 ・私からは以上です。 ・他に、ご意見、ご質問などはありませんか。皆さん方とはよい雰囲気であればと思いますし、せっかくですのでどなたからでも、ご感想でもご意見でもご質問でも結構です。
出席委員	(意見、質問等なし)
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少し皆さん同士が仲良くなられたら（発言しやすくなる）と思いますので、今意見を求めるのではなく、次回以降にしたいと思います。素朴な意見でも何でも結構ですので、何かあれば事務局のほうに届けていただければ、皆で共有してディスカッションしていきたいと思います。 ・では、次に進めさせていただきたいと思います。
2-3 その他 ー直近のスケジュール	
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・その他、直近のスケジュールについて、事務局より説明をお願いいたします。
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・それでは説明させていただきます。 ・直近のスケジュールについては、前回と大きな変更は今のところございません。 ・まず、配布資料4としてお配りしております住民・保護者説明会については、2月25日の広報配布時に全戸配布させていただいております。前回お配りしたのからほとんど変更はありませんが、下部の「当日の内容」の部分を若干修正しております。分りやすく書き足しておりますが、意味に大きな違いはございません。 ・開催日につきましては、予定どおり4月4日（土）、4月5日（日）

	<p>の2日間。4日午前10時より旧三尾小学校2階音楽室にて、14時半より松原小学校体育館にて、19時より松洋中学校体育館にて、5日午前10時より松洋中学校体育館にて、14時半より和田体育館にての2日間合計5回の開催を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> 一部委員の方よりご質問いただいておりますが、説明会は教育委員会にて開催いたしますので、委員の皆様は、検討委員会の委員として参加をお願いするものではございません。ただ、もしご都合がつくようでしたら、一住民、一保護者としてご参加いただければ幸いです。 次に、5月12日（火）の第3回検討委員会にて先進事例校視察の実施を予定しております。視察先は、前回もお伝えしましたとおり、兵庫県加東市にございます東条学園を予定しております。こちらも前回と同じですが、資料5として、学校案内と視察当日のスケジュール予定を配布させていただいております。 視察に関しましては、視察先の加東市へ事前に質問事項を提出させていただくことになっております。制度について、学校について、その他聞いてみたいこと、先ほど安藤先生、鈴木先生がいろいろと紹介いただいた中で「どうなっているのか」と思うようなことでも構いませんし、どのようなことでも結構ですので、今、聞いてみたいと思うことがある方がおられましたら、ご意見をいただけたらと思います。いかがでしょうか。 たとえば、以前、教育委員会として視察に行かせていただいたご時の質問事項ですが、小中一貫教育の導入に至った経緯について、その学校が4-3-2などの制度を取られているなら、どのようにそれを選んで取り組まれているのか、あるいは我々が今行っているように委員会をどうされたのか、どのように保護者や住民の理解を得ながら進めたのか、どのような授業をしているのかなど、そのようなことでも何でも構いません。ご質問、ご意見のある方はおられませんか。
出席委員	(意見、質問等なし)
事務局	<ul style="list-style-type: none"> 今意見等が出なくても、視察に行くのは5月であり、質問事項の提出までもう少し時間がありますので、それまでに何か思いつかれたことがありましたら事務局までご連絡いただければと思います。 また、視察が5月ということで、年度を跨ぎますので、委員の皆さまの中には役職を交代されて新しい方に代わられる方もおられるかもしれません。そういう状況ですが、今回は交代していて視察に行かないという方も、ご質問があればいただきたいと思います。今回、冒頭で教育長からも説明させていただいたとおり、ここで議論したことや視察で見てきたこと、質問事項等もホームページ等で公開しますので、そこで見ていただくことは可能になると思います。また、何かありましたら事務局までお願いいたします。 交代の話について、もし交代される場合は新しい方に資料を引き継いでいただければと考えております。新しい方になかなかお会いできない場合は、事務局に個別相談をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。 話が前後して申し訳ございませんが、視察当日につきましては、平

	<p>日の朝から一日参加をお願いすることになります。ご都合のつかない方もおられるかと思いますが、視察をお引き受けいただく学校や市の都合もあり、日程を調整させていただいておりますので、ご容赦ください。ご参加いただける委員の皆さまにて実施させていただきたいと考えております。後日改めて視察のご案内と出欠の確認をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事務局からは以上です。
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・ただいま、地域の方々への説明会の件と、東条学園への視察の件を説明していただきましたが、この件について、ご意見、ご質問等がございますか。 ・ご質問については、それぞれのお立場からの興味や関心のある内容でよいかと思っております。皆さんはそれぞれお立場が違うので、思いや考えが違うことは多々あると思っております。東条学園も数年実践されていますので、皆さん方それぞれのご質問や感じられているご不安、期待などを、先に実践されているところに聞くことは非常に大切なことだと思っております。そういう意味でも、ご自身のお立場やご自身の人としてのご興味や関心からご質問があれば、寄せていただきたいと思います。 ・ご質問等は、事前に送っていただいたほうが、もしかすると先方も資料をいろいろと用意していただけるかもしれません。まだ時間がありますので、この件については引き続きお待ちしたいと思います。 ・それでは、本日の全体を通して、何かご意見、ご質問、ご感想でもよいと思っておりますが、何かございますか。
出席委員	(意見、質問等なし)
委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・特に無いようですので、それでは、以上をもちまして本日の検討委員会を終了させていただきたいと思っております。委員の皆さま、遅い時間にどうもありがとうございました。 ・次回もどうぞよろしくお願いいたします。
3. 閉会	
	以上